

自由研究発表

遺伝か呪いか、障害者か手話話者か
ーバリ島ブンカラ村における「聾であること」ー

Genetic or cursed, disabled or signers: The positioning of "deafness" in Bengkala, Bali.

西浦 まどか (玉川大学)

NISHIURA Madoka (Tamagawa University)

インドネシアのバリ島北部に位置するブンカラ村は、通常よりも聾者の出生率が高いことで国際的に知られている。本発表では、ブンカラ村において「聾であること」がどのように位置づけられ、どのように価値づけられているのかを、民族誌的に描き出すものである。

本発表ではまず、ブンカラ村にてなぜ聾者が多いのかに関する理由づけについて整理する。ブンカラ村では大きく分けて二つの説明パターンが見られる。第一に、特定の遺伝子によるという「科学的説明」、そして第二に、先祖の過ちと呪いによるという「神話 (*mitos*) 的説明」である。現地では「科学的説明」が「神話的説明」の一種のバリエーションとして並列的に語られることが少なくなく、両者がどのように共存しているのかを検討する。

こうした聾であることの原因論に続き、発表の後半では、今現在の村での「聾であること」の価値づけを検討する。村の聾の人々は、行政や国内外からの福祉支援の文脈で、盲や身体障害などと並列的な「障害者」と見なされる一方で、聾者自身はしばしば他の「障害」と聾のアイデンティティを全く別のものとして語る。また、ブンカラ村は国際的な観光地であるバリ島の一部として、欧米からの観光客やメディア取材陣の訪問をしばしば受ける。こうした外国人との手話を中心としたコミュニケーションや、外国人からのまなざしは、「聾であること」と「手話を使うこと」を国際社会から注目されるものとして再価値づけし、手話を言語として認めさせてきた国際的な聾者の歴史と接触させることとなった。

以上のように、ブンカラ村における「聾であること」の複層的なあらわれを、ローカルからグローバルまで様々なスケール上で民族誌的に整理することを通して、本発表は、ブンカラの「聾であること」の中心には、聞こえるかどうかという聴覚の問題ではなく、音声言語か手話言語かというコミュニケーションの問題が通底していると論じる。